

【論 説】

ソーシャル・ワーク実践と
そのフィードバック

太 田 義 弘

1. はじめに
2. システム思考と生態学的視点
3. 実践モデルの課題
4. ミクロとマクロ
5. フィードバックとその過程
6. おわりに

1. はじめに

このところソーシャル・ワーク実践活動としての援助技術というソフト福祉の課題が、社会福祉の今後を担う重大な関心事として注目されてきている。いうまでもなく社会福祉法と介護福祉法の制定に伴い、そこで期待される社会福祉の専門性と科学性の内実を反映できる中心的課題だからであろう。ところで、わが国の社会福祉の領域においては、対象とする事柄の社会事象の特性への対応が、伝統的に本質的課題であるとする動向、つまりハード福祉の課題が主流を占めてきた。技術という課題は、非本質的、派生的な事柄、あるいはさらに技術を強調することは、ハード福祉への本質にチャレンジすることであるとさえ理解され、批判的に受け止められてきた経緯がある。

社会福祉の特性は、理念や目標の崇高さ、それを具体化した制度や政策の豊かさのみにあるのではなく、今やそれらを入びとの現実の生活の中に実現する実践活動にこそあるといわねばならない。ハードとソフトとは、表裏一体をなす特性の構成要素である。ハードという基礎的、構造的な側面のみが強調されすぎ、ソフトが軽視されてきた片手落の状況がやっと回復してきたのであろうか。両者の不可分の関係が重視される

ようになってきたことは、社会福祉の目標や方向が正しく理解され、期待される社会福祉実現への働きが正常化してきた証拠だといえよう。

援助技術が重視されるようになってきたことは、当然のことながら喜ばしいことではあるが、しかし、それがかつての時代の技術論批判への動向に対する反動であってはならないし、また狭窄した視野で目前のクライアントへの場当りの処遇しかできない操作技術の必要性和錯覚されてはならない。そこにはどうしても明確な科学的方法が必要である。科学的実践への方法論をもたない技術は、当面の処遇策でしかなく、目的のない天候まかせの航海にも似ている。そして、目標やその展望が不明確なために、目標達成への計画と効果的な方法の選択が欠落し、妥当性を欠き、暗中模索な勘と経験のみを唯一の根拠とした援助を提供することになる。それが結果的には技術と称して、クライアントを恣意的に翻弄することにならないとも限らない。

まず、ここで援助技術の展開に先立って、それが立脚する科学的実践方法論の意義を再認識する必要がある。それは、かつての技術論批判に応えられる視野と内容、方法とを具備したものでなければならない。したがって、その方法論とは、ミクロのクライアントに焦点化されたクライアント対ソーシャル・ワーカー関係を中心にした援助をめぐる実践理論の構築だけを意味するものではない。

そこで二つの課題を指摘しておきたい。機会あるごとに指摘してきたところであるが、一つは、その背景にある制度・政策や社会福祉行政、さらに実践機関の課題からクライアントに焦点化した援助、つまりマクロからミクロまでの制度的構造を視野に実践をシステムとして模索しなければならないということである。もう一つは、ミクロからマクロへという視点である。クライアント援助という実践活動の最先端に生じる課題を、如何にその背景を支える組織や方法・施策にフィードバックしていくかということ、それはソーシャル・ワーカーの援助方法や援助機関の実践態勢、さらに政策策定のメカニズムに如何に参加し、有効な提言をし、検討を加え、必要な対応策を再構成していくかということである。

特に、後者の課題は、わが国の伝統的な職業や行政制度の中で、それを実施することは容易なことではなかったが、可能なことから、例えば、実践レベルでは、クライアントのニーズに対して実践機関のプログラム

やサービス・システムを再検討し改善すること、そのような実践機関の姿勢が、やがて行政レベルで、実践機関システムの現実を反映し、それに即応できる弾力的な行政サービス・システムの構成や活性化への一ステップに、契機を与えることになるであろう。これらの動向が、さらにフィードバックされて地域特性に対応した緻密な地域福祉サービス・システムの編成や地方施策・国策拡充への引金になることであろう。

このような理論的解説は容易であるが、マクロ的な間接的援助活動ともいうべきシステム活動が、自然発生的に生起するわけではもちろんない。狭義のソーシャル・アクションとは区別されねばならないが、いわゆるソーシャル・ワーク実践としての専門家による実践機関のアドミニストレーションやプランニングへの参加、日常業務の集大成や研究活動などを通じた地域福祉計画への参画などのマクロ方法論としての実践活動が不可欠であることはいうまでもない。

そもそも森羅万象、不可分の微妙なシステム関係を構成して存在しているわけである。ソーシャル・ワーク実践についてもその例外ではない。したがって、その成果や課題が、その背景にフィードバックされ実践が再構築されていくというシステム関係は、何も目新しいことでは決してなく、当然な視点である。しかし、その自然なシステム関係が、実際には有効に機能をせず、残念ながら分断された視野で実践を模索してきた現実があることも否定できない。

このような課題意識から、本論考では、ソーシャル・ワーク実践の目的であるクライアント援助に焦点を置きつつ、人と環境のミクロからマクロまでのシステム状況を、総合的な実践の視野に組み入れ、実践活動を直接的援助システム過程と間接的援助システム過程とに分類し、前者を補強整備するマクロ・システムへのミクロ・システムのフィードバックの意義を理論的に考察してみたい。

2. システム思考と生態学的視点

フィードバックという概念は、システムの思考方法の中心概念の一つである。システム思考とは、ある実体の現実を事実そのものとして把握しようとすることであるが、物理現象はともかく、社会現象や人間科学、

特に人間やその生活する環境については、絶対的な事実の把握方法があるわけではない。その場合、人間の生活や生ごまを事実にもっと近似した方法で把握しようとする概念がこれである。

そこでシステムのもつフィードバック特性を考察するために、まず第一に、それが依拠するシステム的方法について言及し、第二に、それが目標として解明しようとしている生態についての生態学的視点について触れ、そして第三に、それらの発想をソーシャル・ワーク実践の中で具体化するために、実践モデルとしての生活モデルの課題を考察してみなければならない。

第一の論点については、かねてよりシステム概念が、生態の説明概念としては説得力をもつものの、それを行動概念あるいは実践概念として展開しなければならないと願望しつつ、ソーシャル・ワーク実践へのシステム概念の適用という試行錯誤を積み上げてきた。そして、前号である北星論集第25号においても、その課題を指摘してきた。そのためにやや蛇足になるが、再度『システムとは、ある実体を把握するために、それを構成している秩序立った要素と、その要素の結合がもたらす独特な生態的均衡関係からなる統合的全体性を意味する概念で、その実体を形式的に構造・機能・変容(過程)の三特性に分解しながら統合的に把握しようとする⁽¹⁾ことである』と、その概念特性を指摘しておきたい。

システム思考の特性は、適応を旨とした統合的全体性にあるわけので、そのためにシステムを構成する要素間の結合関係、システムのレベルや階層性、開放性、均衡維持、情報処理、フィードバックとさらに適応という特性から成り立っている。構造・機能・変容というシステム特性を構成する部分に分解して分析把握する方法は、便宜的なものであるといわねばならない。しかし、またこの方法が生態としての人間の生活に接近する目下のところ最善の方法であることも確かである。したがって、システム思考とは、人間の生活をトータルに理解する発想で、ある生態をその実状に近似した状態で把握しようとする方法的概念だといえることができる。

次に、第二の生態学的視点についてであるが、もともと生態学とは、生物学の一分化領域として発展してきたものである。生物とそれらが生活する環境との相互関係についての研究である。したがって、自然科学

として出発し、研究対象も植物、動物、微生物を相手に、特定環境の中における個体の種属特性を研究することと、生物集団の特性と環境との多様な相互関係とに焦点化した研究が主たるものであった。ところが、社会科学の領域でもその発想に関心を寄せるようになり、人間が生活する人と環境との相互関係の解明へと進展をしてきた。その発端は、社会学の領域で都市研究に生態学的視点が重視されるようになったことから、自然科学の枠を超えた人間生態学 human ecology という社会科学的発想に基づく生態学領域が出現をしてきた。

近年は、人間生活にとっても破壊から自然環境を保護することの重要性が指摘されるようになり、自然との調和や共存を課題にしたエコロジー運動が盛んになってきている。生態学的研究の主眼は、『生物集団と、その無機的・有機的生存環境とが、相互に影響を与えながら動的平衡状態を維持している多様なシステムを解明し、秩序性を明らかにすることである』⁽²⁾。その生物生態学に範を求めながら人間生態学は、そのもっとも重要な概念としてコミュニティを研究の対象にしてきた。そして、歴史的にはアメリカでシカゴの急速な都市化に伴う社会解体現象、特に犯罪・非行・離婚・売春・不適応移民・人種問題・家族解体・貧困などの社会問題への対応を模索するために、実践的意図を期待した都市の説明原理として出現して⁽³⁾きた。

この人間生態学に対して、生態学的要因だけではなく文化的要因を重視することの必要性や、調査技法や観察方法的なアプローチのみだけではなく、人間生態学としての方法論の必要性を指摘する批判も⁽⁴⁾あるようであるが、課題は山積していると考えられる。

人と環境との相互関係を考察する人間生態学とはいえ、その特質は、人間そのものよりも環境としてのコミュニティや社会に焦点化されており、強いて人間というならば社会的な人間を研究の対象にしているといえよう。都市生態学ないしは社会生態学あるいはコミュニティ生態学と呼ぶ方が適切であろう。ソーシャル・ワーク実践という視点から、人と環境をめぐる課題に示唆されるところは多いが、実践活動へのこの視点よりの具体的な方法論、特に環境に生活する人間の側面からの人間理解へのアプローチに積極的な方法が欲しいところである。

実践活動としてのソーシャル・ワークに生態学的視点導入の必要性を

強調したのは、周知のごとくキャレル・ジャーメン Carel B. Germain である。科学とヒューマニズムが相克する中で、対外的には行動科学における一般システム理論の出現と世界的規模で拡大しつつあるヒューマニズム再興の機運に刺激を受け、また一方内面的には、ウィリアム・ゴードン William E. Gordon から人と環境との共有領域や人間のもつ可能性、対処能力などについての深い示唆を受け、ケースワーク実践に生態学的視座をもつことの意義を主張したのが1973年のことであった。

彼女によると、生態学は、『順応性に富んだ適合力をもつ有機体と環境とが、力動的な均衡関係と相互依存関係を維持していくことに関する科学である』⁽⁶⁾として、その視野には、『生物科学(生態学や進化論を含む)や文化人類学・社会心理学・動物行動学からの広い知識や理論』⁽⁷⁾と、さらに『人口統計学・公衆衛生・組織論・コミュニケーション理論』⁽⁸⁾などで構成されたシステム的で総合科学的見識の必要性を強調している。そして、その意義は、『人間とその相互関係及び有機的環境との関係と、人間と環境との相互変容関係が質的に改善・強化されることへの援助と、さらに人間の福祉を増進するため環境の整備・充実の追求に関心をもちている援助専門職に、適切で必要不可欠なものを提供すること』⁽⁹⁾、つまりこれからのソーシャル・ワーク援助に必要な視点として、①人と環境との相互依存関係、②両者の関係改善と強化を通じた相互変容への援助、③環境の整備・充実そのものへの働きかけをめぐるシステムの・生態学的視点の意義を指摘している。このような発想をソーシャル・ワーク理論に導入し、実践活動に具体化しようとして、1979年に『ソーシャル・ワーク実践：人と環境をめぐる生態学的な視座』⁽¹⁰⁾を編集・紹介している。

この文献によると、一般システム理論の一形態が生態学で、人と環境との相互変容関係からの進化論的な適応論的視点⁽¹¹⁾をもっており、ソーシャル・ワーク実践特性をそのまま表現する概念 metaphor⁽¹²⁾として、生態学的視座は、人と環境との相互変容関係がもっている特質やその結果に洞察を付与することになる。そして、ソーシャル・ワーク実践における生態学的視点の意義は、人の適応能力を高め、環境を涵養・整備することから、再び両者の相互変容関係を改善するような働きをすることであると指摘している。

さらに、このような視点がもたらす知識や価値が、①人のもつ成長や

創造的適応への固有の能力を解放し、発達させ、強化すること、②成長や適応を阻害する障害物を除去し、そして③環境のもつ豊かな資源を積極的に拡充することを通じて、その専門的な目的に役立つ⁽¹⁵⁾としている。このような前出の論文のアイデアを整理して、幾つかの重要な視点にまとめ、ソーシャル・ワーク実践モデルとしての生活モデル life model 出現の基礎と必然性を指摘している。

一方、ソーシャル・ワークへの生態学的視点導入の重要性を指摘している学者は、この他にも幾人かいるが、メイヤー Carol H. Meyer も忘れることができない研究者である。彼女は、エコシステム eco-system (生態系・生態システム) という生態学的発想をシステム理論で解説しようとする視点に立脚しながら、実践への新しい展望を模索しようとしている。ジャーメインの生活モデルとエコシステム視座とを比較しながら、『生活モデルは、実践モデルであるが、エコシステムの視座は、多様な実践モデルのために概念的枠組みを提供することである』⁽¹⁶⁾として、クライアントの抱えている状況を理解する思考方法であり、生活モデルと類似したような実践方法の構築に執心しているわけではない。またこの視点は、実践者に折衷的なモデル選択ができるような情報を提供しようとしているところに特徴がある。

サイポーリン Max Siporin によると、『生態学的システム・アプローチは、人びとと社会・文化・物理的環境をめぐり、統合的な全体性をなす力動的な理解を可能にするために、われわれにより広い視野と、より統一的かつ統合的な一連の関心をもつことができるようにすることである』⁽¹⁷⁾として、システム研究に対する多様な理論を総合し統合していくところにエコシステム理論のねらいがあると指摘している。

いずれにしても、これらの視点は、人間の生活という生態を、その事実に則した形態で把握しようとするものではあるが、実践への方法論ではなく、実体の説明概念である。メイヤーが指摘しているように、それをふまえた実践理論としてのモデルをジャーメインに期待している。これに応じてジャーメインらが、このような生態学的視座をソーシャル・ワーク実践の場面で具体化しようと、入院している末期患者への生活モデルを通じたアプローチ⁽¹⁸⁾やウィルダニス療法・高齢者福祉・家族療法・精神科医療・児童福祉⁽¹⁹⁾などの場面で、その努力をしている。しかし、結

果的には生態学的視点をもつことによって、援助活動への視点やアプローチを多様なものに行っている例が紹介されているが、生態学的実践方法あるいは生活モデルを展開した援助方法をめぐる固有のアプローチが出現しているわけではない。発想を豊かにする視点を示唆してくれてはいるが、方法としての具体化は、まだこれからの課題であるといわねばならない。

3. 実践モデルの課題

次に、システム思考と生態学的視点に立脚したソーシャル・ワークの新しい実践モデルとしての生活モデルについて言及し、そこから本論考の主題であるフィードバックの課題を考察する手掛りを模索してみたい。

そこでモデルという概念について少し触れておかねばならない。ソーシャル・ワークの実践モデルとは、基本的援助仮説を類型化した概念の総称を意味するものであるが、実際には、目的や援助方法、援助内容、援助対象などに焦点化してとらえる視点の相違から、多様なモデルが存在している。なお実践モデルは、アプローチ概念ともしばしば混同されることが多いが、モデルを実践場面で展開する一連の特徴ある技法がアプローチであると理解したい。したがって、モデルは特徴ある技法としてのアプローチ展開の基礎をなす目標や理論の類型であり、そのモデルを実践場面で具体化して活用する活動をアプローチと峻別することができよう。

それでは実践モデルということで、歴史的にはどのような分類が存在してきたのか、メイヤーは次のように臨床実践モデルの整理をしている。⁽²⁰⁾

最も一般的に活用されている臨床ソーシャル・ワークのモデル

ソーシャル・ワーク (臨床) 実践方法	主要な理論家	起源となる 年代
1. ケースワーク		
A. 診断主義ケースワーク	Richmond, Reynolds, Hamilton, Lowry, Austin	1917
危機インターベンション	Parad, L. Rapoport	1950
心理社会療法	Hollis, Turner	1960
臨床ソーシャル・ワーク	Strean, Turner	1970
B. 機能主義ケースワーク	Robinson, Taft, Smalley	1930
C. 問題解決ケースワーク	Perlman	1950
D. 社会行動ケースワーク	Thomas	1960
E. 課題中心ケースワーク	Reid and Epstein	1970
2. グループワーク		
A. 民主的サービス	Wilson, Ryland, Coyle, Kaiser	1930
B. 心理社会 (療法)	Vinter	1950
C. 調停互恵関係	Schwartz	1960
D. 成長発達	Tropp	1970
E. 集団療法	Rose, Scheidlinger	1950
3. 家族処遇	Scherz, Satir, Sherman	1950
4. 一般ソーシャル・ワーク実践	Bartlett, Meyer, Pincu-Minahan, Middleman-Goldberg, Goldstein	1970
5. 生活モデル	Germain-Gitterman	1980
6. その他諸類型 (心理/行動科学研究者の理論より構成されるもの)		
精神分析学派		1920
ロジャーズ学派		1950
ゲシュタルト学派		1960
実存主義学派		1960

さて実践の基礎理論や目標、方法からさまざまなモデルが指摘できる
ところであるが、この他にモデルを別なカテゴリーから類型化して、援
助方法を規定する期間の長短から、長期処遇モデルと短期処遇モデルと
いう分類も存在している。さらにまた、援助対象のとらえ方というカテ
ゴリーでは、医学モデル・病理モデル・疾病モデルなどと表現はやや異
なるが、一般的には医学モデルとして、臨床医学の診断・治療過程に対
応してクライアントの問題を病理ととらえ、その因果関係を解明するた
めの一連の援助方法の展開モデルがある。この医学モデルは、実践モデ
ルとしての生活モデルの出現によって、むしろ批判的に類型化されるよ
うになったものである。

それらについてジャーメインは、医学モデルが、クライアントを受動的
で依存的な立場にあるものと位置付けて、しかもクライアントのもつ
ている状況よりも人間そのものに関心の焦点を置いてきた傾向の強か
った⁽²¹⁾ことを指摘し、さらに医学モデルは、社会システムと社会過程を用
いることに目をそむけ、また関心をもつことを封じてきた。しかしやは
り、医学モデルは、問題とかニードは個人のなかにあると考えて、その
人を理解し、処遇し、治療するように期待された。したがって、医学モ
デルそのものにもともと無理があるために、状況よりもっと個人に関
心⁽²²⁾が向けられたと、そのモデルのもつ問題性を批判している。

生活モデルが出現する経緯にはいくつかの理由がある。①高密度に社
会化され組織化された人間の日常生活、それは人間を環境から分離して
考察することの無意味さを物語っている切実な現実のあること、②その
現実の姿を科学的にとらえようとするシステム科学や生態学の発達によ
って、生ごまを把握しようとする科学的方法が考察されるようになり、
人間生活への応用の可能性が次第に拡大をしてきたこと、さらに③行動
科学の発達とともにソーシャル・ワーク実践理論の多様化やモデルの乱
立とその特殊分化する傾向がますます増大してきたことなどを指摘して
おかねばならない。

これらの諸事由を背景にして生活モデルといわれる発想は、まず精神
医学者であるバンドラー Bernard Bandler によって提唱された。かれ
は、アメリカでも特殊な社会福祉の専門教育を提供することで有名なス
ミス・カレッジ大学院での、自我志向ケースワークを特集にした論文集

に、『自我支持的心理療法の概念』というケースワークにとって示唆深い小論を発表している。そこで、どのような形態の心理療法であれ、自我を支持 support することは心理療法の基本的な形態であるとして、支持をすることの機能について考察をしている。『サポートとは、生命を維持し、活力を与え、苦悩を和らげ、霊的・精神的な援助と慰めを維持・提供することである。それは、母性愛的機能や父性愛的機能のようなもの、つまりサポート機能とは、父母的、進展的、成長的、教育的なもので、換言すると、それはまさに生活機能という用語にあたる』と、その意味を解説している。⁽²³⁾

そして、かれは初めて生活モデルという用語を用いて、生活を統合的にとらえる概念を紹介している。『それは、生活そのものと、生活過程、そこでの限りない喜びの経験が、われわれのモデルとするもので、心理療法の目標は、生活のなかで理想とするものを成就することに不屈の努力を重ねて接近することである』と、ありのままの生活とその過程、そこで出来事に焦点を置き、示唆に富んだ生活モデル構想の必要性を指摘している。⁽²⁴⁾

これらの経緯や背景、医学モデルへの批判を念頭に、ジャーメインらによって生活モデルは、広く一般システム理論、環境における生ぎまをとらえる生態学と、その視点から人間の成長や変容・適応を考察する自我心理学とを摂取して理論構築をしてきている。この生活モデルは、さまざまな前述のモデルのもつ特徴を吸収・統合した視点をもっていて、ソーシャル・ワークの価値や理論的基礎に立脚して方法の統合化を進める社会的目的に応えようとする姿勢をもっているといわれている。⁽²⁵⁾

また特に、実践モデルとしての人間の生活という視点では、ハートマン Heinz Hartmann の人と環境との相互交換を通じた適応概念と、ホワイト Robert White からはコンピテンス概念、つまり社会的自律性とも呼ぶべき人間固有の能力と、さらにエリクソン Erik H. Erikson の自我発達理論と生活周期概念とに多大な影響を受けて、その特徴ある概念を構成してきている。⁽²⁶⁾

ジャーメインらによって具体化されたソーシャル・ワーク実践をめぐるこのモデルの焦点は、生活を相互に関連する三領域から把握しようとするもので、①生活過程の変遷、②環境のもつ圧力、③対人関係過程と⁽²⁷⁾

の三側面からアプローチを試みている。そして、これらのアイデアを焦点として次のようにまとめて、その概念に代る解説をしている。

『生活モデルとは、問題を病理的状态を反映したものとしてではなく、むしろ他の人たちや物事、場所、組織体、考え方、情報、価値などを含んだ生態系 ecosystem を構成する要素間での相互関係のもたらすものとしてとらえている。したがって、それらは生活上の問題だと理解され、パーソナリティの障害だとは考えないのである。このアプローチは、アイデンティティや自尊心、自我発達、人間関係の構成、社会的機能、可能性の実現を阻害している相互変容関係（人と環境との相互作用） transaction を改善することに関心をもっているのである。それは、また環境を損なうような相互変容関係、つまり一対一の間人間関係、家族、集団、あるいはその他の生態的単位のいずれかで、そのような問題が生じようとも、それを改善するように働きかけるのである。このように生活モデルは、個人がもっている適応能力や、その人の生きる現実の世界がもっている社会的な支援態勢、そこに内包されている問題解決への可能性や成長の可能性を機能させるような専門的活動の形態を求めているのである。またそれは、強化された社会的自律性を通じて、将来生じてくる生活空間での出来事への対処能力を昂揚するようになるという仮説のもとに、成長と成熟を促すような社会状況や集団的な周辺状況をつくり出すようにしている。生活様式に合致したこのような援助は、環境に対するニード充足の質をアセスメントしながら、文化や個人のもつ特殊な広がりから生じる差異を、よく考慮してなされている。そして、それは関連のある社会的ネットワークにいる別な人びとを広範囲に環境的な手段として活用している⁽²⁸⁾』

と定義に代る概念を克明に解説している。

これらより、①問題を生活上での課題として積極的にとらえようとしていること、②人と環境の相互変容関係というエコシステムを発想の基点にしていること、③環境への働きかけを重要視していること、④個人の適応能力と社会的自律性の強化を目ざしていること、⑤生活様式に合致した援助を提供しようとしていることなどを特徴として指摘することができる。しかし、これはまだ発想や視点、アイデアの重要性を指摘しているだけだといわねばならない問題も残されたままである。

前出のギッターマン Alex Gitterman との共著『ソーシャル・ワーク実践における生活モデル』⁽²⁹⁾でも、援助過程に対応した生活を把握する三領域からの考察が、事例とともに詳細に解説されている段階にとどまっておらず、独特なモデルを展開するエコシステムの総合理論や、それをめぐる実践アプローチは、まだこれからの課題であるといわねばならない。

比較的最近のことであるが、ジャーメインが編集した“Advances in Clinical Social Work Practice”⁽³⁰⁾も、30人余りの研究者や臨床家の協力によって出版された臨床ソーシャル・ワーク実践の各論的研究をまとめた論文集である。ここにおいても生活という場を、生態学的視点より発想豊かに援助を模索している努力が十分にうかがえるが、根幹をなす生活モデルを発展させる方法論が、まだ展開されているわけではない。その他、オックスレイ G. B. Oxley による生活モデルの概念特性をケースワーク・アプローチと対応させて整理した研究⁽³¹⁾もあるが、しかし、ジャーメイン自身が指摘しているようにまだ開発途上にあり、システム理論⁽³²⁾や生態学的視座の必要性を指摘した視点から、具体化は前進していない。

ここでどうしても生活モデルの展開を具体化するために、独特な実践理論に基づく方法論と、そのアプローチが必要であることはいうまでもないが、それへの方法を模索するためにも、再度システム思考の原点に戻ることが必要であろう。そこでクライアントの生活というシステム状況を構造・機能・過程とに便宜的に分解して統合し、生活の内実を構成する情報の処理を旨とした『クライアント生活援助システム』⁽³³⁾というシステム的方法論を応用して、生活モデル具体化への歩みを前進させてみたい。そのアイデアを具体化することの一つは、個人の社会生活というエコシステムが、それをめぐる社会生活環境にどんな影響を与え、またその環境が、個人の生活にどのように取り入れられているのかという相互変容関係を、コンピュータによるシミュレーション方法を用いて可能にしてみようという試みである。

結局、生活モデルについての研究が示唆してきたものは、生活という生態を、人と環境との相互変容関係から考察するという意義についてであった。しかし、そこにシステムのもつ一大機能であるフィードバックという概念を前進させ具体化することによって、新しい可能性を展望す

ることになるのではないかと考えている。このような文脈から、本論考の中心テーマであるフィードバックが、どのようなシステム関係から可能なのか、そして何をめざすのかという条件や目標について考察を深めてみたい。

4. ミクロとマクロ

『ミクロとマクロ』という二つの相対をなす事柄を併記して考察することの意味は、単純に小さいこと大きいことを検討することが、目的ではない。それら双方の特性と、それぞれの特性のもたらす他方に対する意味や不可分の関係を重視するところに意味がある。つまり、ミクロとマクロとは、それらの特性がもつシステム関係を問題にしようということに他ならない。

もちろん、事柄にもよるが、大は小を兼ねると、一方が重視されるかと思えば、小事は大事、あるいは昨今の小さいことはいいことだという他方を強調する風潮もある。さて、それでは、その関係を現実の社会事象に置き換えて考察してみよう。まず生態学的には、ミクロとマクロとの関係は、一つは人間と環境との関係に置き換えることが可能である。システム的には、部分と全体あるいは要素と組織、生活ということでは、個人と社会、さらにソーシャル・ワークということでは、援助と計画あるいは活動と施策などと類比することができよう。

社会福祉にとってのミクロの課題とは、一般にクライアントを援助することに焦点づけられた活動、ソーシャル・ワーク実践活動である。マクロの課題とは、その実践活動を支え保障する活動や施策を意味する。すなわち、社会福祉サービスとその供給体制や方法、社会福祉施設、ニーズの把握とサービスの開発や社会福祉計画の策定、社会福祉行政、基本的福祉施策の改善・拡充などということができよう。

さて、社会福祉におけるミクロとマクロという視点では、どちらが関心と呼ぶ課題かと問われれば、もちろん回答はさまざまであろうが、一般的には、日常的な身の周りのミクロ的福祉の現実を連想するのが自然であろう。目標としてあるべき社会福祉の課題を問われれば、国家・社会というマクロ的施策を問題にするということになるのであろうか。もともと

と、この両者は、歴史的にも相互に関係をもって人びとの関心にのぼってくるようなことではなかった。日本国憲法第25条への関心にしても、自らの権利としての社会福祉という受身のミクロ的意識はあっても、その社会福祉を支える国家・社会の構成員という担い手を自覚したマクロ的意識はほとんどなかったし、マクロ的現実に関心をもつ政治家や、社会改良運動に参加している人びと、それらに関心をもつ社会福祉従事者や研究者も、ミクロの問題に対しては、所詮目標としてのマクロ問題追求の手段や結果でしかなく、ミクロとマクロをめぐる総合的な視野から、この問題に取り組んできたとは決していえない。そして、具体的なミクロの方法に結実することのない施策や国家・社会批判に終始してきた。

また一方、ミクロ的側面からは、既定のサービス枠にいかにかクライアントを適合させるかという処遇方法が中心課題だとして、何の矛盾も感じずに重箱の隅をつつくような型にはまった日常業務を事務的・機械的に続けている社会福祉従事者が不在でもない。また研究者にしても、現実離れしたミクロの世界に耽溺し、趣味のような特殊に設定された状況の中で人間の処遇術を構想してきてはいないであろうか。さらに、これからの福祉社会を支えねばならない国民が、このような事態を賢察する姿勢をどれほど自覚していることであろうか。マクロの世界には関心がなく、ましてミクロとマクロの関係を考える発想のない現実は、いかんとも否定しようがない。

結局、ミクロとマクロとは、関心や役割の異なる当事者によって、それぞれ目的と手段とに便宜的に分割されて、相互に関連させることもなく取り扱われてきた。そこで、このような状況をクライアントや従事者を含め、このミクロとマクロの課題に対する姿勢や問題として瞥見してみると、

- (1) 制度としての社会福祉のもつマクロ的優位性
- (2) マクロからミクロへの既定化された社会福祉援助活動の流れ
- (3) 狭窄化したミクロ的方法論の姿勢と問題
- (4) 社会福祉従事者のミクロ的視野と援助姿勢の問題
- (5) 社会福祉従事者のマクロ的発想の欠落
- (6) クライアントのもつ狭窄したミクロ的意識や期待
- (7) ミクロ的課題とマクロ的課題の取り扱い上での不連続性

(8) マクロ的方法論の欠落

などの克服されねばならない課題が、その前提に山積している。

社会福祉の課題が、マクロ的側面に規定されるところが多いにもかかわらず、伝統的にマイクロ側面からのみ考えられてきた問題がある。実践も、もっぱらマイクロの最先端の課題と考えられ、マクロ的発想は所与の条件として絶対視し、批判はしても、それへのアプローチはまったくしてこなかった。したがって、制度・政策というマクロの課題を一方交通で、類型化して受けとめマイクロの対象に伝達していく思考方法しかもちあわせてはいなかったわけである。それは、マクロからマイクロへ、マクロがマイクロを規定するという発想にしか結びついてこなかったからである。

歴史的なマクロの優位性を既定の条件として大前提にするところから、本音と建前とが仕分され、マイクロの援助が、自ずから硬直化し視野の狭窄した発想に固定されて、今日の社会福祉の現実の姿を構成してきたのである。

次に、このマイクロとマクロとの隔絶した現実を、どのようにシステム化し修復する必要があるのかをめぐって、次のような課題の提起をしておきたい。

- (1) マクロ的優位性への偏見の払拭とマクロへの発想の転換
- (2) マイクロとマクロをめぐるシステム発想の必要性
- (3) 人と環境の相互変容関係からなる生活への生態学的視点の重視
- (4) マイクロとマクロを統合したソーシャル・ワーク実践論
- (5) マイクロからマクロへの実践方法論
- (6) マイクロを内包したマクロの実践方法論
- (7) これらを統合した実践モデル
- (8) 実践モデルの展開アプローチとしての方法論

などであるが、かねがねこれらの課題を意識しながら、不十分ながらもそれに応える努力を積み重ねてきたところである。ソーシャル・ワーク実践の目標は、究極的には、生活者としてのクライアントの生ぎまをトータルに援助し、その福祉の達成・維持・向上を実現することである。そのための統合的なシステム実践論を構築することとはいえ、何せ生活というマイクロからマクロにわたって関連する事柄を、その実体つまり生

態としてとらえ、それをアセスメントし、計画を立て評価して実施する方法を定式化することは、至難の業であるといわねばならない。

マイクロからマクロにわたるシステムの視野と、その実体の生態学的理解、それへのチャレンジを理論化したソーシャル・ワーク実践モデル、そのモデルを方法に具体化した実践アプローチの構築と定式化は必至である。今こそソーシャル・ワーク実践が、マイクロの世界だけで試行錯誤を重ねてきたことの問題性と異常性とを再認識しなければならない。生態とは、正態（正常な状態）であり、あるがままの自然な当為の状態を意味する。それはまさにマイクロからマクロというシステムの発想を、当然のことながら内包していなければならない。マイクロの視野でソーシャル・ワーク実践を模索することが、それだけで完結してはならない。いかにマクロ的実践課題に、それらをフィードバックするかということ、つまり実践の成果や問題を、その背景に問題提起し、循環させ、再検討・再処理をして、実践活動へ還元するという総合的な調整活動を行うこと、このようなシステム的でマクロ的な視野の必要性を再認識しなければならない。

5. フィードバックとその過程

マクロ的側面から受けてきた強烈な批判や圧力から、マイクロの実践は、自由で純粋な独自の発想を失い畏縮をし、対決や統合を避けた科学性・専門性と称する閉鎖的で趣味のような研究活動に活路を見出す努力をしたり、日和見的な折衷主義で、その意義を主張してきた。そして、マイクロとマクロの不連続性、背反と対立から、本来、ソーシャル・ワーク実践という不可分の全体性をなす実践活動が、方法・技術と制度・政策とに両極分解して考察され、しかも、その本質をめぐっての相互批判は、他者否定から、ついに自己否定にもつながる熾烈な論争を繰り広げてきた歴史がある。また、援助活動と施策の計画・策定にみるマイクロとマクロの確執と背反、人間と環境とについても、それが分断されたままでの研究など、その問題性の枚挙にはいとまがない。

そのために今や、マイクロ的側面からの方法論研究に関心を抱いてきた者にとっては、マクロへのチャレンジ、それは援助機関の管理運営や実

実践方針、援助施策や計画、社会福祉行政や地域福祉計画などに対して、ミクロのクライアント援助をめぐる最先端での切実な実践課題を、いかに反映していくのかという方法の検討は、緊急を要することがらとして問題提起されてきている。

ソーシャル・ワーク実践は、本来システムとしてミクロからマクロへ、さらにミクロへとシステム循環しながら、現実に対応したミクロ的援助と必要なサービスの提供と、ニーズに応じたサービスの改善充実というマクロ的調整をしながら、その目ざす実践機能を一定の水準で維持しようとする活動である。それがシステムとしてのソーシャル・ワーク実践の生態そのものである。したがって、ソーシャル・ワーク実践とは、システム作用を果たしながら、循環を継続する活動ではあるが、筆者の関心は、やはりミクロのクライアント援助に焦点化し、そこからマクロを模索するという発想を出発点にして実践を構想したいと考えている。

実践というミクロとマクロのシステム関係を結合する機能は、一般に実践過程というシステムを構成する要素（施策・行政・実践機関など）を通じて、マクロからミクロへと働くことになるが、要素のもつ特殊事情や問題によっては、その目的に対応するために複雑な機能を果たし、通常システム循環とは逆の循環機能を果たすことがある。フィードバックという実践機能を最適化し、実践目的を到達するための均衡維持機能がそれである。フィードバックの意義とは、このようなところにある。そして、フィードバックの目的は、それを次のように概念づけることによって明らかになるだろう。つまり、「フィードバックとは、システム過程を通じて処理されてきた情報のアセスメントをし、目標に対する結果の適合状況を維持するために、情報を循環再処理するシステムのもつ基本的制御調整機能をいう⁽³⁴⁾」ところに目的がある。

このようなフィードバックの意義と目的に対して、それはどのようなシステム過程で、どのような方法を用いて展開されるのかについて考察を進めねばならない。その概念を具体化するために、すでに幾度か紹介してきたものであるが、下記に掲げた第一図、ソーシャル・ワーク実践の制度的構造のシステム関係図を用いて解説してみよう。

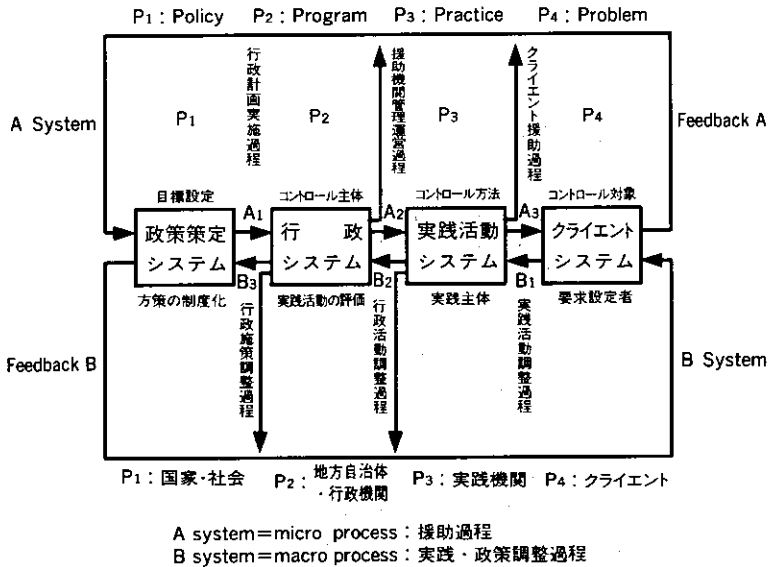
通常の実践過程は、A system というミクロを目ざした援助過程で $P_1 \rightarrow P_2 \rightarrow P_3 \rightarrow P_4$ と展開されていく。この過程を細分類すると、 A_1 が行

政計画実施過程、 A_2 が援助機関管理運営過程、 A_3 がクライアント援助過程という制度的過程から構成されている。その逆循環が、B system で、実践・政策調整過程と呼ぶマイクロからマクロへの、つまり $P_1 \leftarrow P_2 \leftarrow P_3 \leftarrow P_4$ へと積み上げられる過程である。さらに、この過程を細分類すると、 B_1 が実践活動調整過程であり、 B_2 が行政活動調整過程といえるもので、 B_3 が行政施策調整過程と呼ぶことができるシステム過程である。これらの各過程は、それぞれシステム段階毎に、目標とするマイクロのクライアント援助に対して、マクロ的背景を積み上げていくシステム関係をもっている。

これら二通りのソーシャル・ワーク実践過程は、それぞれマイクロとマクロに焦点化された実践過程で、一方の過程を前提にしてなりたつシステム過程である。フィードバックとは、目的とする主要システム過程に対して、それを補足・調整しながら目的への機能を最適化する間接過程である。したがって、援助過程という A system を中心にシステム展開を考えれば、B system つまり実践・政策調整過程そのものがフィードバック過程と位置づけられる。逆に、マクロ的方法から考察すれば、援助過程は、まさに政策策定や行政、援助機関の運営・管理の妥当性を検証するフィードバック過程に他ならない。

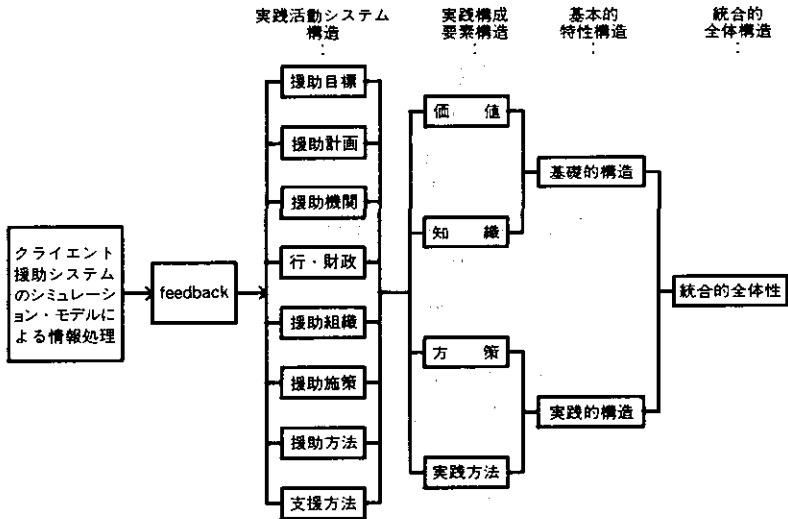
システム関係において、フィードバック機能というものは、不可欠の特性と位置づけられるが、現実のソーシャル・ワーク実践場面においては、フィードバックが、本来の目的に対して間接的な過程ということで、必ずしも必要視されてはいない。実践にとっての派生的な補助機能程度にしか理解されていないのであろう。特に、マイクロのソーシャル・ワーク実践の側面をシステム思考に基づいて展開する場合、当然のことながら、このようなフィードバック機能をも包摂した視野を方法論として、アプローチに具体化していなければならない。

さて、A system である援助過程に焦点化してフィードバックを考察する場合、第一図から理解されるように、マイクロからマクロへの4段階からなる制度的システムが存在しており、このシステム階層間をめぐり3段階のフィードバック過程に細分類される。すなわち $B_1 \cdot B_2 \cdot B_3$ がそれであるが、さらに、その階層間過程は、それぞれ活用できる三通りのフィードバック過程をもっていることになる。①制度的な上位階層への



第 一 図

実践活動システム構造とそのフィードバック過程のフローチャート



第 二 図

フィードバック、②制度的な階層内レベルにフィードバックし吸収されて援助過程へと循環、そして、③目標に対して直接フィードバックされて、実践の背景として機能すること、つまり社会資源や環境の改善・整備としての生活条件の強化へと機能をしていくことがそれである。

次に、ミクロに焦点化した援助過程でのフィードバックを、B₁過程に限定して、その方法について考察してみよう。ここでも前述してきたごとく、三通りのフィードバック過程が、存在することになるが、第一は、目標であるクライアントの生活援助への客観的条件を整備することで、クライアントの現実から援助機関のサービスやプログラム、それらの体制を再検討し改善することをねらったフィードバック過程である。これらの方法の具体化については、コンピュータによるシミュレーション・モデルを用いて展開できるように試行錯誤を重ねているところであるが、第二図のように、それを図示することが可能である。その内容や方法の詳細な解説は、次の機会に譲らねばならないが、その方法やアイデアは、既に第36回日本社会福祉学会大会（1988）にて報告をし、資料として大綱をまとめてあるところである。⁽³⁵⁾

第二は、ミクロの実践活動の最先端でクライアントとソーシャル・ワーカーという援助関係を通じてのフィードバックである。これはミクロの援助概念そのものであるところから、改めてフィードバックという概念で分類しなければならないものかどうか検討を要するところであるが、ミクロの援助過程における局面展開の中でのフィードバック過程、つまりアセスメント局面からプランニング局面、さらにインターベンション局面へと局面間をめぐってのフィードバックである。これらの詳細については、すでに拙論をまとめてあるので、その文献⁽³⁶⁾を参照願いたい。そして、第三には、クライアント・システムより援助機関システムにもちこまれてきた課題を、フィードバック過程で処理をし、処理結果を援助機関システムのサービスやプログラムなどとして一般化するフィードバック過程である。これは、クライアントをめぐる環境や社会資源を開発・改善することに他ならない。

このような方法に基づくフィードバック概念の実証的展開は、次回に譲ることにして、以上、ミクロとマクロをめぐってのフィードバックの意義や過程、その方法についての概念を解説してきた。ミクロとマクロ

の統合は、積年の課題である。このようなシステムの思考方法を具体化することによって、それが初めて可能になるといえよう。

6. おわりに

いつものことながら、課題の考察を深めるほど、残された新たな課題が増大してくるようである。それは、八方破れの研究であるためであろうか。本来なら予測しておかねばならないことを、案外今頃になって自覚させられているのかもしれない。しかし、時間の問題だと思うが、この種の研究が、これからのソーシャル・ワーク実践への科学化・専門化に不可欠であることは疑う余地もない。ミクロの世界からマクロの実践研究への端緒を与えられたと考え、今後の研究を継続する礎にしたいと願っている。

(1988.11.28.)

〔注〕

- (1) 拙論「ソーシャル・ワーク実践研究をめぐる当面の課題」北星論集第25号 1988年 41頁
- (2) 見田宗介他編 社会学事典 弘文堂 昭和63年 87頁
- (3) 高橋勇悦 「現代都市の社会学」 誠信書房 1971年 26頁
- (4) 同書 42-48頁
- (5) Carel B. Germain, "An Ecological Perspective in Casework Practice," in *Social Casework* 54, No.6 (June 1973), p. 325.
- (6) *Ibid.*, p. 326.
- (7) *Ibid.*, p. 327.
- (8) *Ibid.*, p. 327.
- (9) *Ibid.*, p. 326.
- (10) Carel B. Germain ed., "Social Work Practice: People and Environments/ An Ecological Perspective," Columbia University Press, 1979, pp. 1-20.
- (11) *Ibid.*, p. 7.
- (12) *Ibid.*, p. 7.
- (13) *Ibid.*, p. 7.
- (14) *Ibid.*, p. 8.
- (15) *Ibid.*, p. 17.
- (16) Carol H. Meyer ed., "Clinical Social Work in the Eco-Systems

- Perspective*," Columbia University Press, 1983, p. 29.
- (17) Max Siporin, "Ecological Systems Theory in Social Work," in *Journal of Sociology and Social Welfare*, July 1980, p. 522.
- (18) Dena Fisher, "The Hospitalized Terminally Ill Patient: An Ecological Perspective," in C. B. Germain ed., *op. cit.*, pp. 25ff.
- (19) *Ibid.*, pp. 46ff.
- (20) Carol H. Meyer, "Selecting Appropriate Practice Models," in A. Rosenblatt and D. Waldfogel eds., *Handbook of Social Work*, Jossey-Bass, 1983, p. 735.
- (21) C. B. Germain (1973), *op. cit.*, p. 326.
- (22) キャレル・ジャーマイン『ケースワークと科学』（ロバート W・ロバーツ 他編 久保絃章訳 「ソーシャル・ケースワークの理論」）川島書店 1985年 8頁
- (23) Bernard Bandler, "The Concept of Ego-Supportive Psychotherapy," in H. J. Parad and R. R. Miller eds., *Ego-Oriented Casework*, FSAA, 1963, p. 31.
- (24) *Ibid.*, p. 32.
- (25) C. B. Germain and A. Gitterman, "The Life Model of Social Work Practice," Columbia University Press, 1980, p. 360.
- (26) C. B. Germain (1973), *op. cit.*, p. 326.
- (27) C. B. Germain and A. Gitterman (1980), *op. cit.*, p. 7.
- (28) C. B. Germain (1973), *op. cit.*, p. 327.
- (29) C. B. Germain and A. Gitterman (1980), *op. cit.*
- (30) C. B. Germain ed., "Advances in Social Work Practice," NASW, 1985.
- (31) Geneviene B. Oxley, "A Life Model Approach to Change," in *Social Casework* 52, No. 10, 1971, pp. 627-633.
- (32) C. B. Germain (1983), *op. cit.*, pp. 48-48.
- (33) 拙論 「ソーシャル・ワーク実践をめぐるシステムの思考とその方法」北星論集 第22号 1984年
拙論 「ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義」北星論集 第23号 1985年
- (34) 拙論「ソーシャル・ワーク論講義録」 1988年版 11頁
- (35) 第36回 日本社会福祉学会大会 自由研究報告「フィードバック過程への情報処理とソーシャル・ワーク実践」東北福祉大学 1988年に

て報告時配布のレジユメ参照

- (36) 拙論 『クライアント生活援助システムの展開／ソーシャル・ワーク実践へのコンピュータ・シミュレーション』北海道社会福祉研究
第7号 北海道社会福祉学会 1986年 50-60頁